パプリカの栽培

ナカハラのたね

①はじめに

パプリカはナス科に属する一年生草本でピーマンの一種だが、中型品種を完熟収穫したカラーピーマンとは異なり、一般的には大型・肉厚の大獅子系ピーマンの完熟着色果を「パプリカ」と称する。

ピーマンにはビタミンA・Cが非常に多く含まれていることはよく知られているが、パプリカは特にビタミンCとカロテンの含有量が通常のピーマンより多い。完熟させることでピーマン独特の苦味が減少して甘味が増すだけでなく、赤や黄色・オレンジなど鮮やかに着色するので、サラダの彩りや炒め料理のアクセントなどに広く利用されている。

②品　種

近年、中型種でも肉厚で甘味の強い品種が流通しているが、長期間草勢を維持して長く収穫できるのは、大型のタイプである。レッドキング（赤）・ゴールドキング（黄）・オレンジキング（橙）はいずれも果重150gにもなる大型の早生タイプで、草勢が強く長期栽培が可能なことから全国的に広く栽培され、人気商品となっている。

③育　苗

電熱線などを用いて発芽適温（28～30℃）を確保した上で、育苗トレイ（72穴・128穴）や育苗箱に育苗専用培土を入れ、深まきにならないように注意して播種し、覆土は軽く行なう。

発芽後は、トンネルなどの被覆資材を利用して日中20～25℃・夜間15～20℃を保って管理する。本葉1～2枚の頃、3～4号（9～12cm）ポットに移植し、7～10日おきに潅水時に液肥を施す。

④圃場準備

定植2週間前に完熟堆肥を2t/10a施し、排水性・通気性の良い土壌作りに努める。酸性土壌の場合は苦土石灰を100～120kg／10a施用して、pHを中性に矯正しておく。

元肥は一般のピーマンよりやや多めの設計とし、10a当たり成分量でN20～25kg・P15～20kg・K15～20kg程度施す。

⑤定植・管理

本圃定植には最低気温10℃・最低地温15℃以上を確保する必要があるので、定植の7～10日前に幅120～150cmの畝を立て、充分潅水した後に黒マルチを張って地温を高めておく。

若苗定植は過繁茂になりやすく、老化苗は活着不良を起こして初期生育が著しく低下するので、本葉11～13枚の時点で1番花開花の2～3日前が定植の適期。

株間60～80cmに定植し、生育初期は風の影響を受けやすいので仮支柱を立てて倒伏を防ぐ。パプリカは一般のピーマンに比べ草勢が強く、草丈が160cm程度にまで成長するので、追肥は回数・量とも多めに施す必要がある。1回目の追肥は定植2週間後を目安に行ない、その後は10日おきに化成肥料を施す。（液肥の場合は5～7日間隔）

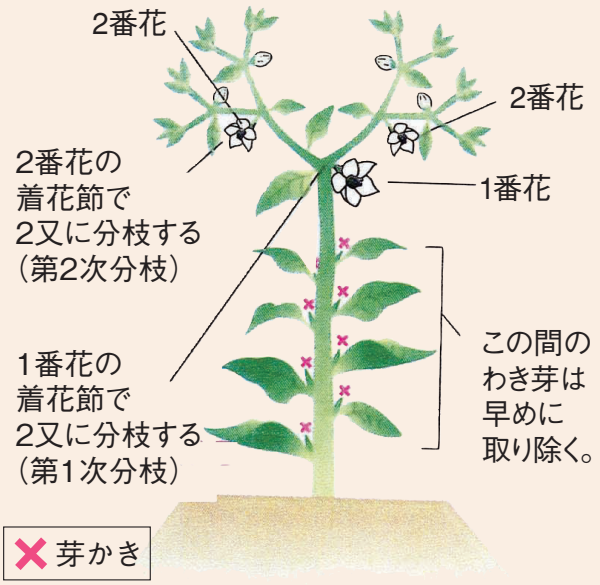
⑥整枝・誘引

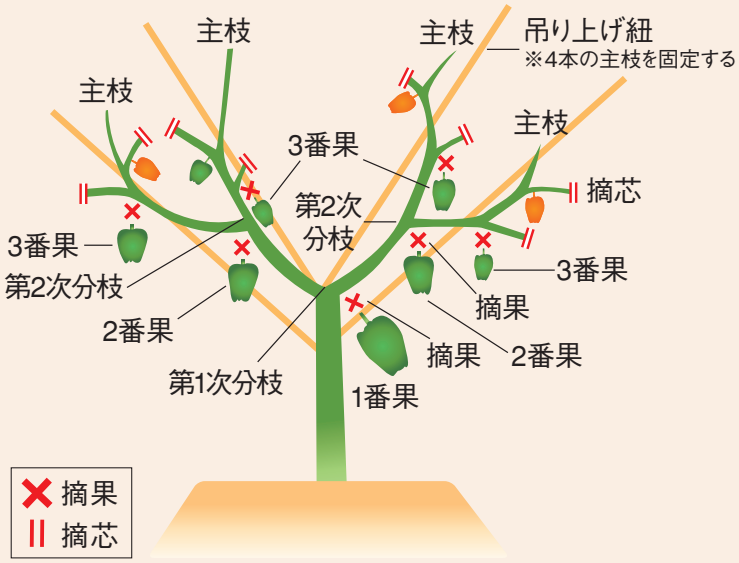
第1次分枝までのわき芽は全て取り除き、第2次分枝の4本を主枝として伸ばす4本仕立てを基本とする。

第2次分枝以降の側枝は1節で摘芯し、株の内側の葉はなるべく摘葉して透光性を維持する。（過度の摘葉は日焼け果の発生につながる上、草勢を弱めるので注意する。）

パプリカは通常のピーマンより果重があり枝が折れやすいため、誘引・吊り上げが不可欠である。畝の両肩にしっかりとした支柱を立て、フラワーネットや紐などで囲って枝が折れないよう保護する。更に、伸ばした4本の主枝を紐で吊り上げ、果重に耐えられるように補強する。

整枝・摘芯の方法





※1番果から3番果までは全て摘果して草勢をつける。
※第2次分枝以降の側枝は1節で摘芯。

⑦摘　果

パプリカの果実は150gにもなるため、果実の生育は株に大きな負担をかける。初期から着果させると果実の肥大や着色に栄養を取られて株の生育が滞り、その後の収穫量に大きな影響が出る。

長期間に渡り良質収穫を目指すならば、初期（1番果～3番果）は全て摘果して草勢を強くすることに重点を置いた管理を行なう。

その後、徐々に着果数を増やしていくが、栽培中期においても全ての果を完熟させると株の草勢が落ちるので、2～3個の果を完熟させる度に1果を若どり（緑果収穫）するなどして、草勢の維持に努めることが安定収穫のための特に重要なポイントである。

⑧収　穫

パプリカも一般のピーマン同様、果実の肥大途中は緑色だが、完熟するにつれて徐々に着色する。その際、黄・オレンジは緑色から当該色に変化するが、赤は一度黒褐色に着色した後に鮮やかな赤色に変化していく。

通常、開花後60日程度で完熟（着色）するが、全体が着色するまで樹に成らせておくと果皮が柔らかくなり傷みが入ることがあるので、9割程度着色した時点で収穫して追熟させると秀品率が上がる。

緑 → 黄

緑 → オレンジ

緑 → 黒褐色 → 赤

ポイント

◎4本の主枝をしっかりと誘引・吊り上げを行なって保護する。
◎初期の果実は全て摘果して、草勢をつける。
◎肥料切れ・水切れを起こさないように、こまめに追肥と潅水を行なう。